

日本特撮アーカイブ

団体名 森ビル株式会社

概要／課題

日本特撮アーカイブは、特撮に関する中間制作物の保管・保全を第一の目的としています。中でもミニチュアなど一次資料となる現品は、適切な環境で永続的に保存していかなければなりません。また、それらを展示・講演会・ワークショップ・上映会などを通して特撮の魅力を後世に伝えることで、特撮文化の継承に繋げていくことを目指しています。

この取り組みは文化庁メディア芸術情報拠点・コンソーシアム構築事業において2012年度に行った調査研究からスタートし、特撮に関する監督や有識者などによって特撮の文化的価値の検証や、特撮に関する情報や文献の整理・体系化を実施し、2017年度からは資料の保管・修復のための活動に発展し、継続されてきました。

併せてアーカイブの運営に向けた組織的な体制の検討も進めました。2012年以来、調査研究や資料の保管・修復活動に携わった特撮関係者が、アニメ関係者らとともに、2017年にアーカイブ活動を推進するNPO法人「アニメ特撮アーカイブ機構(ATAC)」を立ち上げました。ATACは、特撮アーカイブの趣旨に賛同する福島県須賀川市との連携体制を構築。さらに、2018年度からは福島県須賀川市が中心となり、福島県や県内の教育機関、市内商工会議所、ATACなどからなる「特撮文化推進事業実行委員会」が立ち上がり、上映会やトークイベント、特撮技術を活かしたワークショップ等を開催して幅広い年代に特撮文化に触れる機会を提供し続けています。

また、かねてより目標としていた「須賀川特撮アーカイブセンター」が2020年11月3日にオープンし、特撮の中間制作物をはじめとする資料を保存し、特撮文化を顕彰する施設として2021年11月で開館1周年を迎えました。



須賀川特撮アーカイブセンター 公式ホームページ
<https://s-tokusatsu.jp/>

「特撮」の定義と現状

「特撮」とは「特殊撮影」の略語で、実写のカメラと実景、あるいは通常サイズの室内セットでは撮影不可能な映像を、さまざまな工夫の組み合わせによって実現可能とする総合的な「技術」を指します。

特撮の技術は広く一般に使われており、特にCG導入以後は、映画に必要不可欠なものとして表現の拡張とコストダウンの観点から、特別な世界観をもつ映画でなくても多用されるようになりました。その一方で、日本では「特撮」そのものに集客性があり、円谷英二特技監督が1954年（昭和29年）に世に送り出した映画『ゴジラ』を転機に、特撮映像/特撮キャラクターが主役級として人間の役者以上に手厚く宣伝される作品が、数多く生み出されてきました。

その流れは1966年（昭和41年）に円谷英二監修の『ウルトラQ』で、テレビの世界へと波及します。そして週間単位の量産化によってウルトラマンに代表される「特撮キャラクター」をさらに数多く生み出すこととなり、現在ではジャンルのひとつとして認知され、雑誌やビデオ、キャラクター商品などでも「特撮」と銘打った商品が数多くリリースされています。

CG技術の台頭により特撮技術の活躍の場が失われてきた中で、特撮にまつわる品々は廃棄・散逸し、また関係者の高齢化が進んだことで、物品だけでなくその技術についても多くが失われようとしていました。

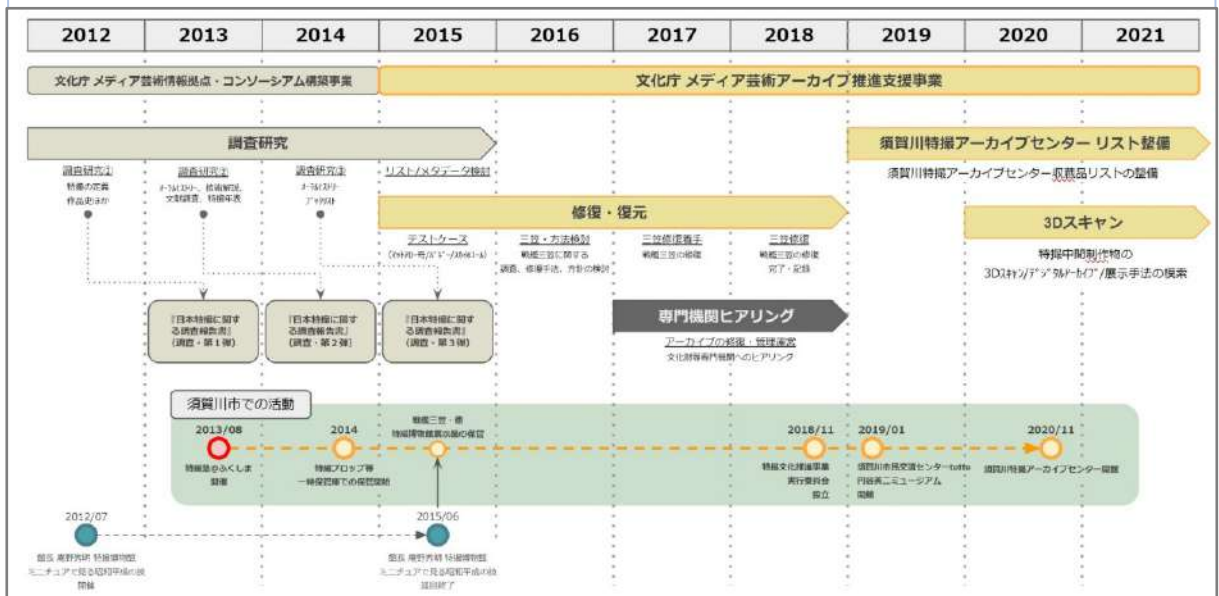
そうした状況下で、2012年夏に東京都現代美術館で開催された「館長 庵野秀明 特撮博物館 ミニチュアで見る昭和の技」を契機に、特撮文化の未来への伝達、そしてミニチュアの保存に関する議論が高まり、文化的系譜の調査が開始されました。

（参考：平成24年度メディア芸術情報拠点・コンソーシアム構築事業「日本特撮に関する調査」報告書）

日本特撮アーカイブのこれまで

「日本特撮アーカイブ」では、文化庁の委託を受け、2012年度から「日本特撮に関する調査」を実施、特撮の文化的な側面を明らかにし、オーラルヒストリーの記録などを行ってきました。その後、福島県須賀川市の協力のもと資料の保管が始まり、2020年11月3日の須賀川特撮アーカイブセンター開館に繋がりました。

2018年度には資料の保管において課題の一つとなっていた修復・復元について文化庁メディア芸術アーカイブ推進支援事業の助成のもと、テストケースとして映画『日本海大海戦』で使用した戦艦三笠のミニチュアの修復・復元を実施。さらに、2019年度にはアーカイブセンター開館に向けた収蔵品のリスト化作業を実施しました。また、2020年度からは新たな試みとして、着ぐるみをはじめとする劣化の激しい立体物の3Dスキャンを行い、デジタルアーカイブにも挑戦しています。



成果

2015～2018年度：ミニチュア類の保存に向けた修復・復元

半世紀近く年月を経たミニチュアはあちこちに損傷や劣化が見られ、長期保存や展示等の利活用のためには修復・復元が必要であったため、2015年度に試験的に実施し、2016年度からは、円谷英二監督の最後の長編作品となった映画『日本海大海戦』で使用された全長約6mの戦艦三笠の修復復元を行いました。

また、修復にあたっては、状態の調査から始まり、作業方法や修復復元の方針を検討した後、2017年度から2018年度の2年間で修復・復元作業を行ってきました。



2019年度：「須賀川特撮アーカイブセンター」開館に向けた収蔵品のリスト化

須賀川特撮アーカイブセンターで保管される物品は、特撮作品に使われたミニチュア・立体造形物・背景画・設計図面・写真・フィルムなど多岐に渡ります。それらは施設のオープン前は仮の保管場所に収められていましたが、人員不足やスペースの問題などから整理が追い付かず、全体像が把握できない状況となっていた為、円滑なセンターオープンに向けてリスト化を実施しました。



品名	材質	形状	サイズ	状態	備考
1. 戦艦三笠	金属	戦艦	約6m	良好	
2. 戦艦三笠	金属	戦艦	約6m	良好	
3. 戦艦三笠	金属	戦艦	約6m	良好	
4. 戦艦三笠	金属	戦艦	約6m	良好	
5. 戦艦三笠	金属	戦艦	約6m	良好	
6. 戦艦三笠	金属	戦艦	約6m	良好	
7. 戦艦三笠	金属	戦艦	約6m	良好	
8. 戦艦三笠	金属	戦艦	約6m	良好	
9. 戦艦三笠	金属	戦艦	約6m	良好	
10. 戦艦三笠	金属	戦艦	約6m	良好	

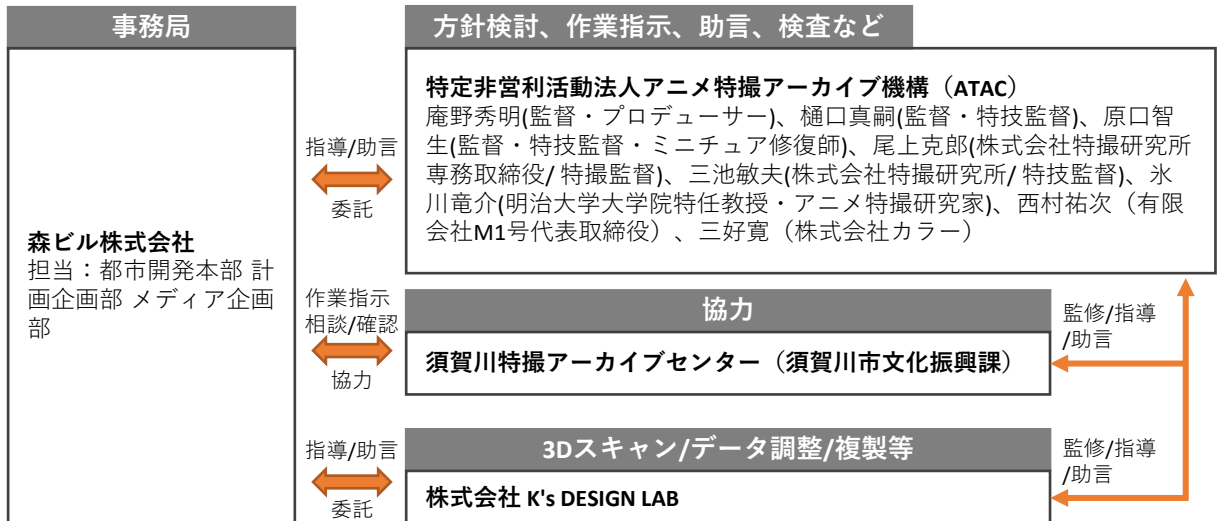
2020～2021年度：劣化が避けられない造形物のデジタルデータ化

着ぐるみなどのラテックス（ゴム）製の造形物はこれまでの調査から、いかなる対策を施しても永続的な保管は難しいと言われており、古いものは加水分解が進み、すでに当時の形状が崩れてしまっているものも多く、かねてより現物保管が困難な物品については、デジタルアーカイブ化の必要性が高いと言われてきました。そこで2020、2021年度事業では、今後のデジタルアーカイブ化を推進していくために、初めての試みとして3D立体スキャニング技術を活用した立体物のデジタルアーカイブを試行しました。



体制

「日本特撮アーカイブ」では「特撮」関連の様々な活動を通して、特撮の魅力を後世に伝え、特撮文化を継承していく活動を行っています。また、福島県、須賀川市、地元商工会議所や専門学校などが連携し発足した「特撮文化推進事業実行委員会」や「須賀川特撮アーカイブセンター」と「円谷英二ミュージアム」という須賀川市内の施設とも連携し、特撮文化の保存・継承・価値創出に関する協力体制を構築しています。



残された課題

現在も特撮に関連した数多くの中間制作物の廃棄/散逸が続いており、保存されていても保管場所の維持や継続が困難なケースも各所で見られます。文化財産としての特撮中間制作物の保管・保全を今後も継続的に進めていくことはもちろん、アーカイブを担う人材の育成も課題です。

公開方法/文化的・社会的・経済的な意義

「須賀川特撮アーカイブセンター」における特撮関連中間制作物等の公開ならびに講演会・ワークショップなどを実施。「庵野秀明展」（2021年、国立新美術館）、「生誕100年 特撮美術監督 井上泰幸展」（2022年、東京都現代美術館）への展示協力や、関係機関での公式サイト等への掲載も併せて行い、それら活動を通して特撮文化の普及啓蒙を行っています。